

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

協力的・参加的・体験的な学習を効果的に進めている実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

佐賀県杵島郡白石町

○学校名

白石町立須古小学校

○学校のURL

<http://cms.saga-ed.jp/hp/suko-e>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各1学級、【特別支援学級】2学級、【合計】8学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】115人（平成27年11月20日現在）
（内訳：1年生24人、2年生19人、3年生17人、4年生15人、5年生16人、6年生24人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成26・27年度人権教育研究推進事業人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

郷土を愛し、心豊かにたくましく生きる子どもの育成
知：正しく 仁：優しく 勇：元気よく

【人権教育に関する目標】

自分や友だちのよさを知り、ともに伸びようとする児童の育成をめざして
～関わり合い、認め合う活動を通して～

○人権教育に係る取組一口メモ

人権が尊重される「学習環境づくり」「学習活動づくり」「人間関係づくり」の三つの視点に立ち実践を行うことで、自分や友達のよさを知り互いを大切にする態度を育み、実践行動ができる児童の育成を目指した実践。

○人権教育にかかる取組の全体概要

【研究主題】

自分や友達のよさを知り、共に伸びようとする児童の育成をめざして
～関わり合い、認め合う活動を通して～

【研究の目標】

一人一人の児童がその発達段階に応じ、人権の意義・内容や重要性について理解し、自分や友達のよさを知り、互いに認め合い伸びようとする児童を育成する。

【研究の仮説】

(1) 人権が尊重される学習環境づくり

人権尊重の視点で日常生活習慣やきまりを見直し、実践を呼びかけたり、校内環境を充実させたりすれば、児童自身が気づき、人権意識を高めていくことができるであろう。

(2) 人権が尊重される学習活動づくり

人権に関する知的理解を深めるための授業づくり、児童の実態に沿った、人権尊重の視点を取り入れた授業づくりを行えば、児童の人権意識が高まり、自他のよさに気づき、互いに認め合い、学習に意欲的に取り組んでいこうとする児童が育つであろう。

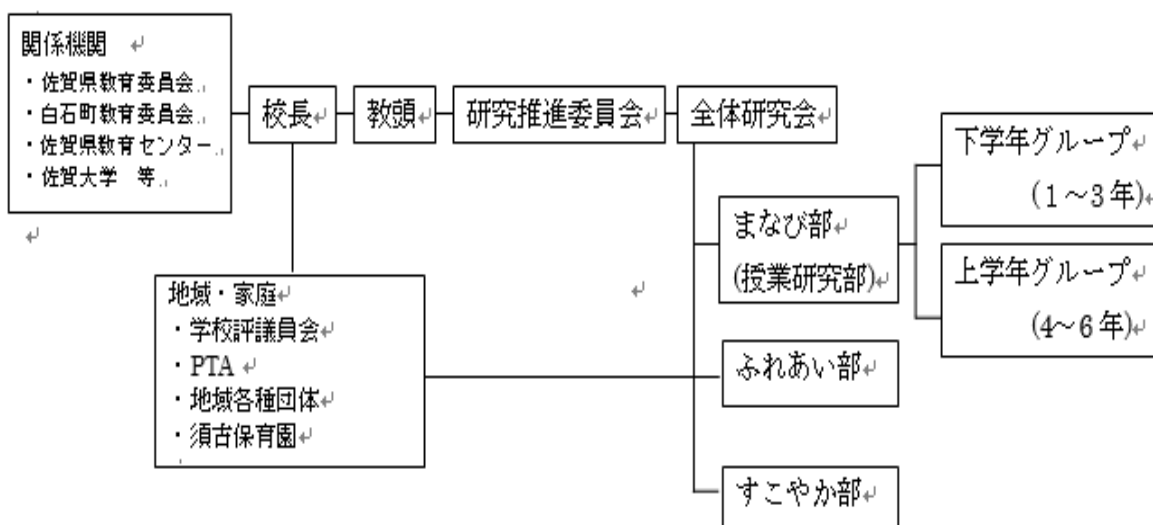
(3) 人権が尊重される人間関係づくり

他者とのふれあいを大切にする様々な活動を設定すれば、自己肯定感の高まりとともに自信を持って自己実現に努め、集団の中で相手のことを考えながら意欲的・積極的に行動することができる実践力のある児童が育つであろう。

【目指す児童像】

- 差別に気づき、自分や友達を大切にする子供
- 思いやりをもって関わり、互いに認め合うことができる子供
- みんなのことを考え、よりよい方法を考えることができる子供

【研究組織】



3. 特色ある実践事例の内容

【まなび部（授業研究部）の取組】

◆ 人権に関する指導内容と方法についての研究

授業の計画，教材研究，指導方法の工夫等を中心に研究する。

特別支援教育の視点にたった教室環境，板書等

《児童の実態に応じた授業づくり》

児童を中心におき，各クラスの児童の実態や各クラスの気になる児童についてしっかりと実態把握を行うところから，授業づくりを行った。

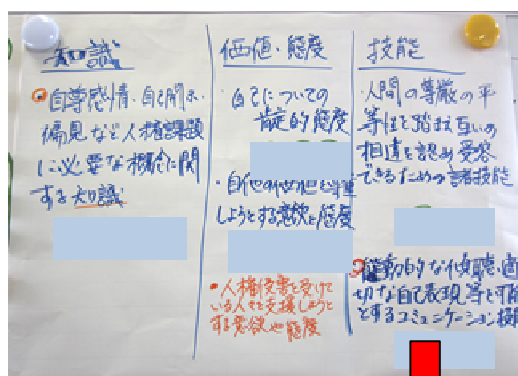
○ 授業づくりに向けての児童の実態把握シート

児童の「人権意識」について，また，本校児童の課題から，「自己肯定感」「表現・コミュニケーション力」について児童の実態をみる。それをもとに，人権教育の視点から，どのようなクラス（児童）を目指すか，そのためにはどのような授業，活動を仕組んでいく必要があるか考える。

児童の実態	人権意識について	自己肯定感について	表現・コミュニケーション力について	その他
・みんなと仲良くしなければいけない。「ふさわしいことば」や「ちくちくことば」等，相手に思いやりを持って接しなければいけないことは分かっている子が多い。 ・一番であることにこだわったり，他と比べたりする言動がみられる。 ・いろいろな差別については未知の部分が多い。	・ほとんどの子は高いが，数人低い子がいる。自分が認められていないという感を持っている。 ・嫌いの食では，自分のがんばりを表す子が多い。認めてもらいたいという気持ちの裏がみられる。	・幼きから自己中心的な表現になることがみられ，相手の話を聞かず，共感したりすることは難しい児童もいる。 ・自分の考えや思い，心情を表現することが難しい児童が数人いる。 ・嫌う合うことが難しい児童もいる。	・きんづけなど，決められたことは守ろうとする児童が多い。 ・他からの評価や，職位付けに敏感である。	・自分のよさを気づき，友だちのよさにも目を向けることができる児童。 ・自分の考えや思いを自信を持って伝え，友だちの考えや思いにも耳を傾けられる児童。 ・みんなと力を合わせて活動できる児童。

○ 気になる児童を中心にした実態把握（ワークショップ形式）

- 対象となる学級について，グループで，その学級のよい面，課題となる面について出し合う。
- 対象となる学級の「気になる子供」の姿を出し合い，その背景や思いを考察，分析し，交流する。自己肯定感の低い子に注目し，その背景を考える。
- 「第三次とりまとめ」が述べている「人権教育を通して育てたい資質・能力」の3つの側面より，取り組むべき内容をあげていく。



※指導案に明記したもの

〈ワークショップの様子〉

本単元での人権教育を通して育てたい児童の資質・能力。

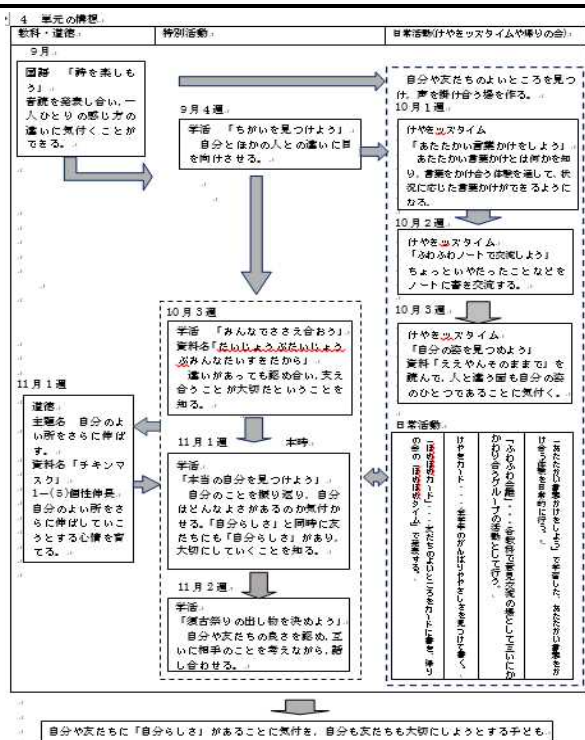
- 【知識的側面】友だちも自分と同じ大切な存在であることがわかる。（知・ア）
 【価値的・態度的側面】自分や友だちのよさを認め，相手に伝えようとしたり，友だちの思いや考えを理解したりしようとする。（価・アイ）
 【技能的側面】人の話をよく聞き，知りたいこと，わかりたいことを伝え合うことができる。（技・イ）
 相手のことを自分と置き換えて考えることができる。（技・ウ）

○ 総合単元的な授業づくり

人権教育は全教育活動に関わるものである、児童の全人的な成長を促すためにも、互いに関連づけながら授業づくりを行うことが必要であると考え、「児童につけたい力」を明確にしたあと、各教科・領域や日常活動と関連させながら、総合単元的に授業づくりを行った。

○ 「けやきッズタイム」の取組

毎週月曜日朝の時間（１５分間）に各学級の実態に合わせて、グループワークトレーニング、ソーシャルスキルトレーニング、エンカウンター等の活動に取り組んだ。



〈けやきッズタイムの様子〉

【ふれあい部の取組】

◆ 人間関係を豊かにする集団づくり

○ たてわり活動

全校児童を8つのグループに分け、年間を通し活動を実施

- ・ なかよし遊び（毎月第２火曜日）
- ・ たてわり掃除
- ・ 運動会でのなかよしダンス
- ・ なかよしゲーム集会
- ・ なかよし交流給食





〈たてわり活動の様子や感想〉

◆ 豊かな人間関係を育む活動

- 集会活動（1年生を迎える会、人権集会、平和集会、なかよし集会）



〈人権集会では、各学級で決めた「人権のあいことば」を発表します〉

◆ 校内環境

- けやきカードの掲示

学校のシンボルである「けやきの木」を設置し、児童が書いた「けやきカード」を掲示した。カードには、友達の高さや優しい言動、友達との関わりの中で生まれた感謝の気持ちなどを書くようにした。

毎週水曜日の給食時間に放送で紹介している。



〈けやきの木〉

【すこやか部の取組】

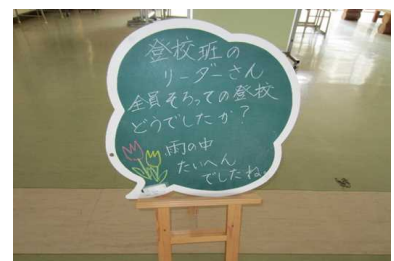
- ◆ 一人一人の人権が尊重される環境づくり



〈廊下掲示〉



〈トイレの入り口〉「そろえてくれてありがとう」

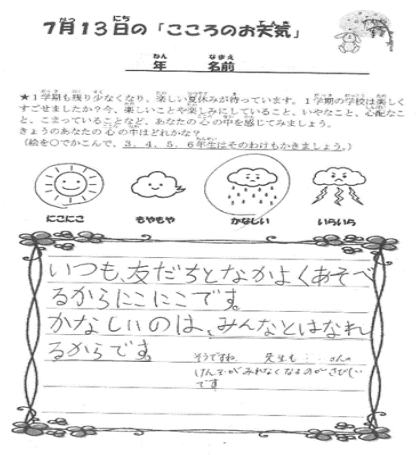


〈「心のおくりもの」〉
毎朝、児童玄関前でお出迎え

◆ 基本的生活習慣づくり

○ 「ころのお天気しらべ」

児童の内面的な健康状態を見つめる機会として毎月15日前後に実施。気になる事項がある場合は、担任・教育相談担当者が個別に話を聴く機会を持つ。



〈ころのお天気カード〉

○ 「ひだまりルーム」の活用

週2回（火・金）昼休みに教育相談室を開放。児童が「ちょっと一息 ほっとしたい時」「話を聴いてほしいとき」に自由に利用できる空間を提供している。級外職員や学校教育支援員が対応している。



〈ひだまりルーム〉

◆ 児童生徒の意識調査作り，調査実施・意識調査のデータ作り，児童生徒の変容の結果分析（人権意識アンケート，hyper-Q U）

○ 人権意識アンケート（6月、12月 年間2回実施）

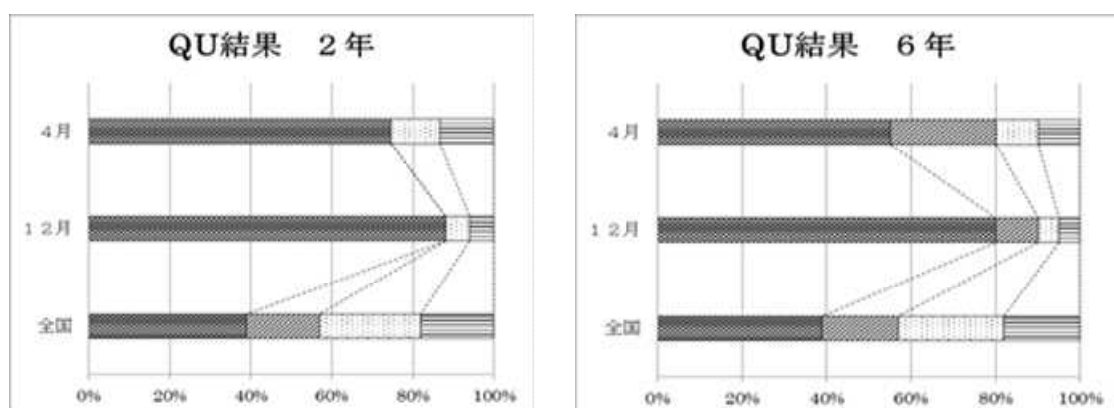
人権意識アンケート（3～6年用）名前（ ）

自分の気持ちに一番近い数字に○をつけましょう。

1. 自分によいところがある。
2. 自分のことが好きだ。
3. 仲のよくない友だちと力を合わせることは大切なことだ。
4. 友だちが弱いものいじめをしていたら、やめるように注意することは大切なことだ。
5. まわりの友だちとちがっていても、自分の考えを伝えることは大切だ。
6. 自分とちがう考えを友だちが言っているのを最後まで聞くことは大切だ。

1 学期調査後、「授業づくりに向けての児童実態把握シート」に記入する。

○ hyper-QU（4月、12月 年間2回実施）



1学期実施後、夏季休業中に、全職員で分析、考察を行う。スクールカウンセラーにも同席してもらい、専門的なアドバイスを受ける。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

【まなび部（授業研究部）】

道徳や特別活動を中心に授業づくりを進めてきた。スタート時は、「どういう教材を使用するのか」についての意識が強く、児童の実態に合っていない資料を用いてしまうケースも生じていた。そこで実態把握のやり方を見直し、「授業づくり実態把握シート」の活用、ワークショップ形式で「学級の良い面・課題を書き出す」「気になる子供の姿を出し合う」「気になる子供の背景を考える」「取り組むべき内容を取り上げる（第三次取りまとめより）」の手順で、授業へアプローチした結果、より児童の実態に合った授業づくりを行うことができた。また、授業の土台の部分を補う活動として、週一回朝の時間に「けやきッズタイム」を位置づけ、グループワークトレーニング、エンカウンター、ソーシャルスキルトレーニングを実施したことで、人権意識の土壌作りを行うことができた。

【ふれあい部】

これまで継続して実施してきた活動のため、若干マンネリ化している部分が多かった。教師主導の部分を子供たちに委ねることで、新しい取組を取り入れたり、児童が主体的に運営したりする姿が見られるようになった。また、「けやきカード」の取組では、掲示したカードが子供たちの目に触れる機会が余りなく、形骸化していたが、給食の時間に校内放送で紹介したり「今週のけやきコーナー」に一週間貼り出し児童の目にとまるようにしたりしたことで、児童の関心が高まり期待感が増した。

【すこやか部】

校内の環境作りの面では、これまで各担当が、それぞれに行っていたことを、一緒に校内を周りながら意見を出し合い人権という視点で改善を行った。それにより、児童の意識も高まり、落ち着いた生活、ひいては心の安定につながった。

5. 実践事例の実績、実施による効果

【人権が尊重される学習環境づくりについて】

- 「目指す児童像」を児童にも意識させるため、「けやきッズ」の合い言葉を考え、校内に掲示した。いろいろな場面で取り上げることで、児童の発言や作文の中において、合い言葉が使われるなど、児童の意識も高まりが感じられた。
- いろいろな人が過ごしやすい学校づくりを目指し、校内環境の整備にも取り組んだ。また、トイレの掲示物など、児童の目線にたった掲示物にかえたことにより、児童の意識も高まり、落ち着いた生活、ひいては心の安定につながっている。
- 人権に対する意識を把握するために、継続してアンケートを行った。数値化することで、児童の実態や変容を客観的に把握することができた。また、hyper-QU、パールソングテストの結果を生かして、実態把握ができ、実態把握をもとにした授業づくりにいかすことができた。

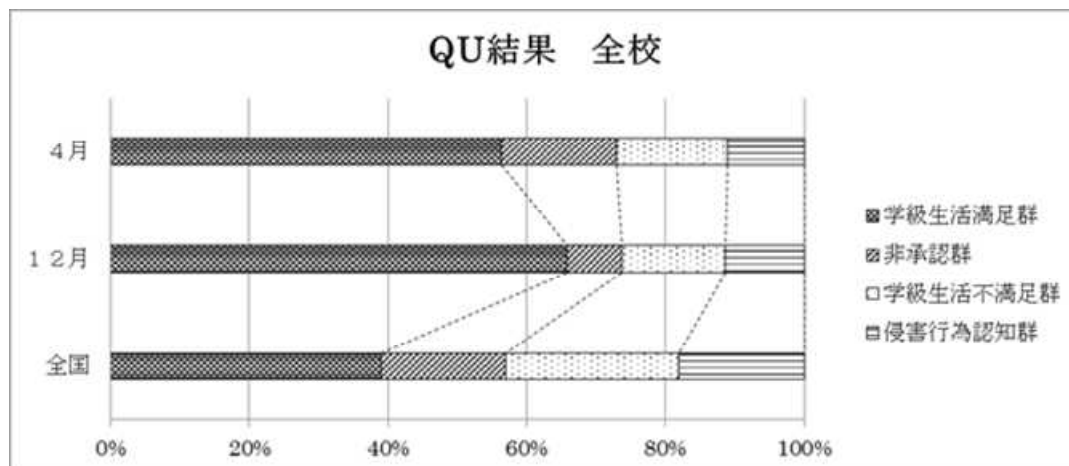
【人権が尊重される学習活動づくりについて】

- hyper-QUや、パールソングテスト、日常の関わりから見えてきたことをもとに、児童がかかえる課題をとらえ、授業を組み立てていった。「児童の実態把握シート」にも引き続き取り組んだ。各学級で、人権教育で取り組むべきことを明確にすることができた。また、今年度はワークショップ形式で気になる児童を中心としながら、実態把握を行ったことにより、授業づくりの視点を明確にすることができた。
- 各教科の授業の中でも、自分の考えや思いを表現する場を意識して設定していくことを共通理解した。隣同士やグループで伝え合う場の設定、発表形態や教材の工夫により、児童は自分の考えを伝えることができ、自信にもつながっていった。
- 「児童につけたい力」の明確化、「各学年の年間計画」「授業づくりにおける教師の視点」などの作成、検討により、教師間で共通理解が図られ、学校教育全般において人権教育に取り組むことができ、成果につながった。

【人権が尊重される人間関係づくりについて】

- 昨年度より、たてわり活動のあとに、人権の視点を与えながら振り返りの作文を書かせたことにより、児童の意識の高まりがみられた。そのことが、次の活動において、相手を思いやり、認め合ったりする行動へとつながっていた。
- たてわり活動を通して、高学年が低学年を思いやる姿や、低学年が高学年を信頼して活動する姿が見られた。

〈Hyper-QU結果と考察〉



hyper-Q Uにおいては、学級生活満足群が増え、全国平均と比較してみても望ましい結果がみられる。しかし、個人をみてみると、まだ、自己肯定感が低い児童もみられる。そのような児童へのアプローチや、授業づくりなど、さらに研究実践を深化、充実させていく必要がある。

6. 実践事例についての評価

学校教育活動全体において人権教育の視点を軸に、自分の考えや思いを持ち、それらを表現したり、友達の考えや思いに共感したりしながら関わり合い、認め合う活動の幅をひろげる活動を行ってきた。児童は、個人差はあるものの、「自分は大切な存在であること」「友達も大切な存在であること」に気づき、友達と協力しながら学校生活をよりよくしていこうとする態度が養われてきている。学校での取組を家庭や地域に学校・学級通信等を通して分かりやすく伝えることはできたが、連携を図っていくことは十分に行えなかった。今後、地域人材の活用なども含めて、よりよい連携の在り方を模索していきたい。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

白石町立須古小学校

人権が尊重される三つの視点としての学習環境づくり・学習活動づくり・人間関係づくりを目指した「ふれあい部」・「まなび部（授業研究部）」・「すこやか部」の活動を中心とした取組が展開されている。

児童の実態を正確に把握するため、実態把握シートを活用するとともに、ワークショップ方式で「学級の良い面・課題を書き出す」「気になる子供の背景を考える」「取り組むべき内容を取り上げる」などの手順を踏まえて進められた授業づくりには、「第三次とりまとめ」の手法が生かされている。教職員がまず児童の実態を確かに把握し、それらを日々の授業づくりに生かそうとする姿勢や、縦割り活動、けやきカードなどの取組を通して児童相互の人間関係を深めようとする誠実な姿勢がくみ取れる。学校のシンボルであるけやきの木を生かした「けやきッズタイム」の活動などにも特徴が見られる。

「実践事例についての評価」欄にも書かれているように、今後は学校の取組が地域全体に広げられることを期待したい。